

モノ学の冒険 京都旅行記

松山 隆幸

[訪問先1]

福田金属箔粉工業株式会社 (山科区) <http://www.fukuda-kyoto.co.jp/index.html>

- 元禄13(1700)年創業。金属箔粉の金属加工を扱う。1936年に国産初の電解銅粉を製造し、表面処理技術と共に導電塗料用銅粉のコア技術となる。伝統に根ざした製品は、カップ麺のフタから新幹線のディスクプレーキパッドまで、様々な用途に使用されている。
- 会社設立 1935年(昭和10年)
- 創業 1700年
- 資本金 7億円 従業員数 525名

[Memo]

- 312年の歴史。内200年は金箔。森下仁丹の銀箔も担う。
- 1912年のタバコ包装用錫箔から工業用途としての箔事業がスタート。
- 酸化しない銅: 誘電塗料用銅粉の開発に成功。太陽光発電/EVなどに使われる。
- 伝統技術を基盤とするハイテク技術の創出は、既存技術や生産技術の改善の積み重ね、異業種の知恵との融合から生まれる。
- 顧客が何を求めているか。 敏感に感じ、気づき、行動する。
- 昨日と違うことをやってみよう!
- 身の程をわかまえる。

[感想]

日本には500年以上も続く企業が34社、300年以上が580社、そして京都には1090社もの100年企業があるという。

312年の歴史をもつ福田金属箔粉工業は、金属箔ならびに1000種類以上の金属粉を商品としている中で、常に顧客が何を求めているか、常に顧客のニーズに耳を傾け、常に昨日と違うことをやってみよう! という変化に対して敢えて挑戦するマインドを組織の中に浸透させているところから、結果として“錆びない銅”を生んだといえる。社是にある「つねに創意工夫をこらして仕事の改善をはかる」が、単に言葉としてではなく、組織の行動様式として浸透しているところに、300年以上も生き続ける秘訣があるのだろう。

あらためて、梶田氏へ「変化に対する態度」についてじっくり話を聞いてみたい。

モノ学の冒険 京都旅行記

[訪問先2]

株式会社堀場製作所 (南区) <http://www.horiba.com/jp/>

- > 昭和20(1945)年創業の分析・計測機器企業。エンジン排ガス測定・分析装置分野で80%の世界トップシェアを握る。社是は「おもしろおかしく」。
- > 創業 1945年(昭和20年)10月17日 設立 1953年(昭和28年)1月26日
- > 資本金 120億11百万円 全社員 5202名 連結売上高 1,185億56百万円

[Memo]

- おもしろ! おかしく! “JOY & FUN”
- 1945年の学生ベンチャーから創業。
- 全社員の44%は日本人(アジア人:54.4%)、フランス人18.6%。
- 27カ国、37Companyを“One Company”として束ねる。
- 研修所がフル稼働。

[感想]

“全社員56%は外国籍の社員。特にフランス人は19%近くもいる。文化や背景の大きく異なる社員をどのようにしてOne Companyにするのか?”という堀場社長への質問に対し、“食”文化というお互いの共通項を強調する中で、京都の「座る方も一流。作る方も一流。」という食文化の優位性を強調することで、日本文化に対する尊敬の気持ちが会社に対する求心力の源となっているという。そして、社員の交流の場である研修所を“プレミアムを体験する”ことでその求心力を高める装置として考えているところに、単なる組織論ではない、人の心を踊らせる仕組みがしっかり備わっていることを感じた。それは、経営における“判断”にもあらわれていて、“思いのあるところに積極的に投資する!”という。戦略論ではなく、至って人の“スピリット”や“気持ち”を大切にするという“人”中心の経営に苦心され工夫しているところに、堀場製作所のコトづくりの大きな特徴がある。

京都にはそもそも多様性が備わった文化があり、その多様性を維持するために、“人まねをしない”ことが文化として定着していることで、自ずからすべての人がフラットに対話できる文化が備わっていると堀場社長は言う。その文化がグローバル化に絶妙に活かされていることが、京都のモノづくり企業の大きな特徴なのかもしれない。

スタンドグラスをメタファーに、「スーパーマンはいないけれどスーパードリームチームは作れる!」という堀場社長の自信に満ちた言葉に、あらためて京都を本社としてグローバルなビジネスを展開する堀場のコトづくりと人づくりを基盤にした組織の強さを感じた。

モノ学の冒険 京都旅行記

【訪問先3】

近藤先生 工房

【感想】

柘榴(ざくろ)を毎年書き続けたお父様の話が一番印象的。自然の変化を全身で感じながら、制作に打ち込む姿は、おそらく近藤家の流派なのかもしれない。とにかく、京都の自然の中に行む工房の時間と空間が、都会とは大きく異なり、ゆったりと流れる時間の中で瞑想できる空間として感じられた。

【訪問先4】

大西清右衛門美術館

【感想】

まさに鉄が生きている！生きている鉄を茶釜としてカタチにしていこう！という印象が心に残った。伝統工芸とは言うものの、多くはマニュアルもなく、今ある茶釜を眺めながら、過去への思いと想像を膨らませ、“今”に作品を生み出す。発注を受けてから20年もの歳月がかかるものもあるという。伝統を受け継ぐというのは、単に技術を継承していくという直線的な時間経過の軸だけでなく、“今”から“過去”を想うという逆の時間軸も併せ持つことが必要なのかもしれない。

【訪問先5】

西村圭功漆工房

【感想】

200年もの茶筒の色合いと手に持つ感覚が今でもよみがえる。漆の技術そのものはすでに完成されそこにイノベーションはないというが、“今”つくる漆器が、100年後、200年後も使われ続け、その200年後の人々が“今”に想いを馳せる姿を想像するところに、あたためて“伝統”の奥深さを知る思いがした。日本でも漆は取れるが、需要が減っていることで、コスト高となり、なかなか使えない現状を聞くと、あらためて地産地消、高付加価値な地産品を海外で売る仕組み考えみる必要があるのかもしれない。日本最古の漆製品が、縄文時代の古墳から出土された櫛(くし)だという話を聞くと、改めて日本のモノづくり文化の歴史の長さと、以外にもおもしろかったのかもしれないという想像を掻き立てられる思いがした。

モノ学の冒険 京都旅行記

【総括】

金箔や陶芸、茶釜、漆器の職人文化が京都のモノづくり文化の基層を形成し、福田金属箔粉社のようにその基層から継承する技術を今に活かす企業、堀場製作所のようにその基層にあるモノづくり文化の真髄を自社に上手に生かし、「人まねをしない」「身の程をわきまえる」ことで多様化を柔軟に受け入れグローバルに積極的に展開する企業など、古都・京都に力強く根付く2つのタイプの企業を訪問して、あらためて、「伝統とは何か？」を考える2日間となった。

基層を形成する職人の世界においても、伝統技術を更に進化させて新たな素材に挑戦する職人もいれば、技術そのものは完成しているものの“今”を起点に過去の作り手の思いを想像しながら作ったり、“今”から未来へ思いを馳せながらモノを作ったり、自分の内なる世界の想像力をカタチとして表現することにおいては、伝統工芸の職人と言えども、常に創造力をかき立てながら“今”に仕事をしている。

“モノに魂を込める”とは古くから言われていることではあるが、あらためて作り手の過去への思いや未来への想像力がカタチとなって表現されたところに、唯一無二の独自の世界が表現されていることに心から感心した。

他人や他社との比較、ベンチマークといった言葉が虚しく聞こえる。文化に根ざして生きることが、人の根となり、企業の根となっていることにあらためて気づかされるとともに、文化の多様性と歴史が豊かな土壌となり、企業文化につながり、独自の実りをつける、まさに生物多様性の世界が京都にあることを再発見できた。

